

バタネス諸島のイジャンと
ブトン島のラサリムー城跡
-東南アジア群島部の原史時代「城郭」-

坂井 隆

Ijangs in Batanes Ids and Lasalimu Fort in Buton Id
- Protohistoric 'Fortification' in the Archipelago of Southeast Asia -

Takashi SAKAI

Summary

Ijang ancient structures found in the Batanes Islands, Philippines, was reported by Eusebio Dizon as fortification ruins, and he appeared similarity with Gusuku structures in Okinawa. After field observation on Savidug Ijang and Dinojo Point Ijang, this paper confirms that the function of Ijangs is not fortification but religious monument of Megalithic culture. Meanwhile, on Lasalimu Fort ruins, one of early fortification among numerous number of such remains in the Buton Island, Indonesia, it was found structural resemblance in several elements with Ijang. And it was constructed before the development of ceramic trade in this island. Firstly I thought that fortification of Southeast Asia and Gusuku were originated as treasure house monument, which were combined with religious prayer space. However Ijangs and Lasalimu do not show any elements of treasure house. If similar structure is found among much number of Gusuku, these examples will be considered as good comparison data to understand the development of prayer space in the early history of Southeast Asian archipelago area.

1 はじめに

1995年、フィリピンの考古学研究者エスピオ・ディゾン Eusebio Dizon は、ルソン島と台湾の間のバシー海峡に連なるバタネス Batanes 諸島に残

るイジャン Ijang を報告した。彼によれば、イジャンとは住民のイヴァタン Ivatan 人が先史時代に自然地形を利用して築いた城郭で、バターネス諸島では南部のバタン Batan 島とサブタン Sabtang（地図 1）およびサブタン島西の無人島イブホス Ivuhos 島に残っている⁽¹⁾。その後ディソンは沖縄を訪れてグスク群を見学し、特に古式グスクとイジャンの共通性を指摘した。彼が強調したのは、共に自然地形を利用する立地状況である⁽²⁾。

沖縄のグスクにはヤマトの中世城郭とは異なった点が多いことはすでに多く指摘されると共に、緩やかにカーブする珊瑚石灰岩の城壁を見れば誰しも容易に感じる場所である。かつて筆者は、グスクの成立背景に東南アジアの初期城郭と同様に、舶載陶磁器などの宝物庫を兼ねる宗教（祭祀）空間から出発した可能性を仮説として指摘した⁽³⁾。

しかし陶磁器出土がほとんど見られない城郭的な遺跡も、東南アジア群島部には少ないながら存在していたことをその後知った。その代表的なものが、ディソンが報告したバターネスのイジャンである。たまたま筆者は、ディソンと共にバターネスのイジャンを訪ねる機会を 2011 年 9 月に持った。

それとは別に筆者は 2003 年以降、インドネシアの南東スラウェシのブトン Buton 島にあるウォリオ Wolio 城の調査を行っていた。ブトンは東南アジアでも群を抜いて城郭遺跡が濃密に分布している地域⁽⁴⁾だが、その大部分は 16 世紀に成立したイスラーム王国との関連がある。しかし一部には先イスラーム期成立の伝承を持つ遺跡もあり、その一つであるラサリムー Lasalimu 城を 2012 年 12 月に訪ねることができた。

イジャン群とラサリムーは、それぞれ強烈な印象を筆者に与えた。これらの踏査からやや歳月が経ったが、本稿ではイジャンについての踏査報告をすると共に、ラサリムー城での知見も踏まえ、ディソンの指摘の是非も含め東南アジア群島部での原史「城郭」についての現在の考えを述べたい。

2 バターネスのイジャン群踏査報告

バターネス諸島はルソン島北端から 280 キロ離れているが、台湾の南端までは 180 キロしかない。またバタン島北端のイラヤ Iraya（1009 メートル）活火山をのぞくと、ほとんどの島は海拔 200 メートルほど以下の丘陵で占められ、

平地は海岸地域の狭い部分に限られている。そのため人口も少なく⁽⁵⁾、スペインの植民地フィリピンに組み込まれたのは、18世紀末になってからだった。

そのような辺境とも言えるような環境だが、オーストロネシア語族の台湾からの拡散仮説を考えるには重要な位置にある島々である⁽⁶⁾。

2011年9月に実施したイジャン群の踏査は、報告者であり長年バターネスの考古学研究を行ってきたディソン自身の案内によって行なった⁽⁷⁾。直接踏査をしたのは、サブタン島のサヴィドッグ Savidug イジャンとバタン島のディオジョ岬 Diojo Point (チャドピダン Chadpidan) イジャンである⁽⁸⁾。その他にバタン島では、バスコ Basco とイップッド Itbud、またサブタン島ではチャヴァヤン Chavayan とサブタンの計4イジャンを確認した。それらは遠望しただけで実際に内部には入ってはいないが、立地状況を知ることができた。

以下、それぞれについて報告したい。

2-1 サヴィドッグ・イジャン

最も有名なイジャンで、ディソンが最初に報告したスケッチ図は良く知られている。

サブタン島はバターネス諸島の中心バタン島から南西に5キロほど離れた位置にあり、芋状の形をした比較的小さな島(南北約10キロ、東西約5キロ)である。バタン島側の東海岸中央にサヴィドッグ集落があり、このイジャンは集落の南約1.2キロで海岸からは1キロほどの内陸になる(北緯20度18分14秒、東経121度52分55秒)。

島中央から伸びる丘陵地形の突端で、全体は3段の平坦部を持つ円筒形をなしている(全体は約180×160メートル、写真1)。平坦部の両端が急勾配の崖になっている特異な形状は集落の海岸からも十分に識別できるが、実際には尾根の末端で独立した丘陵ではない。最上段の平坦面は海拔63メートルを測るが、入り口である西側尾根の鞍部からは8メートル強の高さになる。この鞍部は東側では最下段の平坦面に相当し、北側に中段平坦面に登る階段が削り出されている(写真2)。中段は最も広く、内部には東側に1メートル強の高さで狭い上段がある(写真3)。中段は不整楕円形(約20×15メートル)をなし、下段の平坦面はその東側と北側のみに広がっている。

中段の縁は小児頭大の自然石を4-5段積んだ壁が取り巻いており、主に西側と南側に良く残っている。下段の縁にも同様の積み石壁の痕跡が見えるが、上段にはない。中段の南側には4個以上の有孔石柱が認められ、そのうち2個は直立していた(写真4)。これは安山岩自然石を柱状に加工したもの(約1.0×0.2×0.2メートル)で、上端近くに円孔(直径約5センチ)が開けられて反対側まで貫通している(写真5)。直立している2基は同じ方向に穴が見えるため、設置位置と貫通方向は関係がある可能性がある。ただし穴のある上端面は、それぞれ形が少しずつ異なっている。

遠くから垂直に近く見える各段の法面は、実際には小礫を多く含んだ地層で近くからは凹凸がそれなりに認められる(写真6)。この状態は人為的に加工されたとは言い難く、自然の水平堆積層が風雨で削られた結果と考えるのが妥当である。また各段の平坦面をみると、最も広い中段でも必ずしも完全な平坦ではない。これは礫が密集して堆積した地層が3層残ったと思われる。たまたま上段のみが狭いために、全体として人為的な構造物のように遠くから見えたことになる。

しかし注意を要するのは、削り出し階段と積み石壁は明らかに人間が作った構造であることである。そのような場所に、有孔石柱の設置がなされたのである。また削り出し階段は1箇所だけであり、また積み石壁は防御施設と呼ぶにはあまりに簡単すぎると言わざるをえない。さらに積み石壁の内部には、湧水や井戸は確認できなかった。入り口となっている鞍部の尾根側は人為的な堀切ではなく自然の緩斜面であり、西側尾根からの接近は容易である。そのため、このサヴィドッグ・イジャンは防衛目的の構造物=城郭と呼ぶことは極めて難しい。

なお前述のような立地のため、ここからは海岸線はもちろん海峡を隔てたバタン島の南部を見渡すことができる(写真7)。またディソンはここでの12世紀代の竜泉窯系青磁片と中国製と思われるビーズの出土を報告している⁽⁹⁾。

2-2 ディオジョ岬(チャドピダン) イジャン

バタン島の北端には、イラヤ火山が聳えている。この山の西側で島全体の北西端に近い位置で北に突き出たのがディオジョ岬である。バタン島の中心地バ

スコから直線距離では3キロ弱だが、緩やかな丘陵地帯で遮られている。この岬（長さ約200メートル、幅約100メートル）は2列の斜行する高まりで構成され、その海側の部分がイジャンである（北緯20度28分23秒、東経121度57分40秒）。

集落遺跡が発見された東側の海岸から見ると、イジャン部分は低い鞍部から海に突き出た頭のように見える（写真8）。頂部の平坦面は海面から20メートルほどの高さがあり、入り口となる鞍部側も10メートル近くの急勾配の崖である（写真9）。

かなりの傾斜があるにも関わらず、鞍部側から東側にかけて小児頭大の自然石を2列5段ほど積んだ壁の跡が見られ、一部は良く残っていた（写真10、11）。上に登るにつれて土器片が地表に散り始め、中には甕形土器の底部の大きな破片も現れた（写真12）。

頂部は東端にピラミッド状の小さな高まりがあるほかは、緩やかな細長い平坦面をなしている（最大幅約120×30メートル、写真13）。この頂部自体には特に人為的な構造は確認できないが、上述の土器はここで使われていたことは間違いない。東端の高まりは基部から5メートルほどの高さで、この上部は凝結溶岩でできた畳2畳ほどの平坦面になっている（写真14）。

何よりも頂部からは、海を挟んで集落跡の海岸からイラヤ火山の勇姿が聳える絶景が眼前に迫っている。この抜群の眺望こそが、この場所の最大の特徴と言える。土器がここで使われていたのは、何らかの飲食などの行為があった可能性を示している。しかし頂部だけでなく、岬全体に水利はない。また居住を示唆するような遺構も、表面では確認できない。土器の使用は決して恒常的な生活の痕跡とは考えられず、また積み石壁も防衛構造とはかけ離れている。勾配の急な崖面にそのような壁を設けても、防衛に関わる実質的な利点が得られないことははっきりしている。

2-3 その他のイジャン

バタン島のバスコ・イジャン（北緯20度26分15秒、東経121度58分14秒）は、バスコ市街地から南に1.5キロほど離れた丘陵上の円筒形状の岩山で空港からも望める（写真15）。平地からの高さは80メートル以上（海拔約100メー

トル)あり、周囲は垂直な崖になっている(写真16)。しかし入り口と考えられる丘陵の頂部側から見ると、高さは10メートル程度しかない(写真17)。遠くからは比較的平坦に見える頂部だが、実際には大きな岩が露出しており平らな土の部分は少ない(写真18)。

イップッド・イジャンは、バスコから直線で12キロ離れたバタン島南東海岸近くにある。平地から遠望できるこのイジャンは、やはり50メートル近くの高さがある頂部が比較的平らな岩山である(写真19)。周囲は同じように、急勾配の崖になっている。

サブタン・イジャンはサブタン島の北東海岸で、バスコとの間のフェリーの港になっているマラダダン Malakdang 集落の背後に位置する(写真20)。より正確には南に接する集落シナカン Sinakan との境界をなす尾根上になる。海拔40メートルほどの尾根の先端で、盛り上がった部分である。海岸までの距離は100メートル程度で、やはり周囲が急斜面なのに対し頂部は平坦に見える。

チャヴァヤン Chavayan・イジャンは、サブタン島東海岸南端の集落チャヴァヤンの背後に位置する(写真21)。海拔30メートル程度の尾根上にある、盛り上がった岩の上になる。サヴィドッグ・イジャンとは直線で3キロほどの距離になるが、間により高い丘陵があるため相互に識別はできない。

前述のように、これら4イジャンは遠望して位置を確認しただけのため、平坦頂部などに何らかの人為的施設があったかどうかは不明である。しかし共通しているのは、集落を見下ろすコブ状の岩山という立地と形状である。また比較的近くから頂部を眺められたバスコ・イジャンの場合、そこは自然の岩そのままの中に僅かに草地があるだけであった。顕著な人為的構造物は確認できず、ヤマトの中世山城のような平坦面造成も認められなかった。サヴィドッグやディオジョ岬のような低い積み石壁がある可能性は否定できないが、大規模なものは他の3イジャンも同様に存在していないと思われる。

なお見学対象ではなかったイブホス島ディブ Dibhu 岬のイブホス・イジャン(北緯20度18分58秒、東経121度47分48秒)では積み石壁が確認されると共に、近くでは舟型配石墓群も発見されている(北緯20度18分59秒、東経121度47分56秒)⁽¹⁰⁾。

3 ブトン島の初期城郭—ラサリム—城

ブトン島はインドネシアのスラウェシ島の南東部に接する属島で、南北に長い（南北約 200 キロ、最大東西幅約 70 キロ）。全体が 2-300 メートルの丘陵をなして平野は海岸部を除いて少なく、人口も多くない⁽¹¹⁾。

西側のムナ島との間が南北に長いブトン水道で、その南端に最大の港バウバウ Bau-bau がある。バウバウは東部インドネシアの良港の一つで、特に香料産地のマルク Maluku 諸島への重要な中継点だった。そのため 14 世紀にはジャワ島のマジャパイト Majapahit 王国とつながりを持つ形で、ブトン王国がここに誕生した。この王国は 16 世紀前半にはイスラーム化し、イスラーム王権はさまざまな曲折を経ながらも 20 世紀まで存続していた。

この王国の王城がウォリオ城で、広大なこの城跡（南北最大長約 1 キロ、東西約 700 メートル）はバウバウの港を見下ろす珊瑚石灰岩の段丘端に残っている。現存する珊瑚石灰岩塊で築かれた長い城壁は大部分が近年修復されたものだが、その出発は 17 世紀初頭である。南と東に 1 キロほど離れた位置にそれぞれ出城が残るだけでなく、王国領域内の戦略的場所にはウォリオ城と同様の技術で建てられた防御拠点城郭が数多く見られる⁽¹²⁾。

残念ながら異常に多く残っている城郭建造の流れはほとんど明らかでなく、ウォリオ城自体の歴史が 14 世紀に遡ることは陶磁片調査で判明したものの、具体的な遺構との関係は不明のままだった。そのため伝承でウォリオより古い築造が語られている、城郭の調査が必要となった。そこで 2011 年 12 月の踏査では、南東海岸のリウ Liwu、東部の港町パサールワジョ Pasar Wajo 近郊のタキンポ Takinpo、そして中部東海岸のラサリム—を訪ねた⁽¹³⁾。

ここでは最も古い要素があったラサリム—を報告する。

ラサリム—城跡は、ブトン島中部東海岸のラサリム—港⁽¹⁴⁾の南西 700 メートルの位置（南緯 5 度 15 分 30 秒、東経 123 度 09 分 10 秒、地図 2）で、バウバウから直線距離で約 80 キロ北東にあたる。王国樹立以前の出発地の一つの伝承がある他、18 世紀後半にオランダに抵抗したヒマヤトゥディーン Himayatuddin・スルタンが居住したとの伝承もあった⁽¹⁵⁾。

車の走る道路に面して、いきなりウォリオ様式の城門⁽¹⁶⁾と珊瑚石灰岩の城

壁が現れた。最近修復されたのが明らかな状態だったが、上記スルタンの居住伝承とは符合する遺構である⁽¹⁷⁾。そこを入ると平坦な空間の200メートルほどの先に、比高20メートルほどの高まりがあった(写真22)。急勾配の斜面には直登する小道があり、その先の頂部は凹字形にえぐれた状態(幅約15メートル、高さ約8メートル、写真23、24)である。これは地山を削り出して凹字形状にしたもので、その底部両側には珊瑚石灰岩塊が積まれた壁構造(残存高1メートル強、幅約1メートル)が残っていた。

内部は、この入り口部分とほぼ水平な広い空間(約100×30メートル)が広がっていた(写真25)。興味深いのは、削り出して残った部分が土塁のように周囲を取り囲んでいたことである。登ってきた入り口部分が最も厚く10メートル以上だが、異なった厚さながら似たような高さの壁が周りにあった。内側は傾斜も同様ではなくかなり緩斜面もあったので、この部分は積み上げ土塁とは考えにくい。正面奥はこの土塁状部分がなく、正面と同じような積み石壁があり、中央が空いていた(写真26)。ここは搦め手門と考えられ、外側は急傾斜になっている。

このような積み石壁は正面から左側に続き、次第に大きな塊に変わって行った。一方、右側は土塁状部分が長く伸びていた。そこは途中で上に登れるようになっており、その先に珊瑚石灰岩塊が積まれて築かれた広いテラス平坦面(約5×5メートル)があった。ここはちょうど丘陵の端部に位置し、遠くまでの眺望があり海岸を望むことができた(写真27)。海岸低地からの比高は30メートルほどで、堡壘あるいは物見台のような施設と考えられた。しかし何ら胸壁のような施設を外側に持たず、また櫓のようなものを建てた柱穴も見られない。

内部には珊瑚石灰岩塊で囲われた数基のイスラーム墓があったが、墓標などは見られず土が露出していたので、新しいものと考えられる。

全体に草の繁茂が激しかったので詳細を確認することはできなかったが、次のようにいくつかの事実が明らかになった。

- 1 独立した小さな珊瑚石灰岩自然丘陵地形を要害とする
- 2 頂部を削り出し土塁と積み石壁を併用して囲む
- 3 小礫積み上げでテラス面を形成する

1は珊瑚石灰岩段丘端に立地したウォリオ城と要害地形利用という広い意味

では共通するが、ウォリオ城は西側と南側では空堀を掘って排出した石灰岩塊で高い城壁を築いており、技術のあり方は異なっている。ブトンのイスラーム時期の他の城郭も、このように自然地形にのみ依拠して建てられたものは見ていない。2は調査不十分で疑問点も残るが、削り出しが最も大規模にされたのは正面入り口部分だけのようである。原地形を造作して土塁と積み石壁で囲まれた平坦面を丘陵頂部に築くのは大工事のようにも思われるが、ブトンの珊瑚石灰岩は気泡が多く意外に簡単にできたのかもしれない。3は位置的には理解できるが、なぜ胸壁を持たないのかが不明である。逆に考えると、この構造物は軍事的意味を持っていなかった可能性も想定できる。

このラサリム一城の本体部分の年代を考える資料はない。ただウォリオ城とその出城ではどこでも膨大な陶磁片が地上に散乱しているが、ここでは全くそのようなものを見ることがなかった。築城者が陶磁貿易とは無関係だったか、あるいはブトンで陶磁貿易が本格化する以前の年代だったかの、いずれかの可能性が考えられる。

4 討論

4-1 東南アジア群島部の初期城郭

東南アジア全域での城郭史は、1511年に起きたポルトガルのマラッカ占領を境に前後に分けて考えられる。ポルトガルの勝利の基本的要因は彼らが使用した大砲にあり、以後多くの都市の城壁は大砲での攻撃に耐えられるよう石造になっていった。それ以前は一部レンガを用いた土塁が基本だったが、群島部では特にマジャパイトの都トロウラン Trowulan のように何の城壁も持たないか、あったとしても木柵だったような場合が多い。

そのような中で、主に西側のジャワ島西部からスマトラそしてマレー半島では、土塁と空堀を併用した環濠遺跡が比較的多く発見されている⁽¹⁸⁾。ほとんど全ての遺跡では輸入陶磁片の出土が豊富であり、年代的には10～13世紀前後とほぼ共通する。

それらで最も古い可能性のあるのは、スマトラ南部ランブン Lampung 地方のプグン・ラハルジョ Pugung Raharjo である。土塁と空堀で囲まれた楕円形平面の3郭が東西方向に接しており、中央郭から東郭の順で築造された状態が

はっきりしている。しかも中央郭と東郭内部および東郭外に合計 13 基の石積基壇遺構が分布している。これは原史時代の巨石文化に起源がある遺構で、そのような巨石文化的な信仰聖地が城郭化していく過程が明らかになっている。もともと豊富な湧水地点であり、そのような自然条件から宗教センターが生まれ、さらに陶磁貿易の拠点として防衛構造を築き始めることになる。石積基壇遺構の一つからは石造菩薩像が発見されたため、インド系の宗教の受け入れ前後に変わることなく大きな役割を持ち続けたことが明らかである。

他の初期城郭遺跡の場合、そのようなはっきりした継続性は明らかではないが、原史時代信仰の長期間の残存が一般的であることを考えると似たような経緯があった可能性は必ずしも否定できない。

問題は、なぜ突然土塁と堀を築いたのかである。プグン・ラハルジョの西郭と中央郭は深い沢で囲まれた台地上を堀で区画している。堀は未発掘のため本来の深さは不明だが、常時水が流れていた可能性は低い。東南アジア大陸部のドヴァラヴァティ Dvarvati などの都市国家のほとんどは楕円形平面の環濠を持っていたが、それは雨季に水位が上がる低地の内部を乾燥化して湿気を除く目的が想定できる。しかし群島部の多くの例は台地上の立地であり、ましてバンテン・ギラン Banten Girang のようにほとんど接して二重に堀を巡らす例もある。発掘されたバンテン・ギランの堀は 7 メートルの深さを持つ断面 V 字形の構造だが、そのように防衛的な意図だけでは考えにくい平面状態を示している⁽¹⁹⁾。

石積基壇遺構を内部に持たないプグン・ラハルジョの西郭は、非宗教聖地を区画したのかもしれない。また中央郭と東郭に取り込まれた石積基壇遺構は規模が小さなものばかりだった。菩薩像が出土したものや最大の遺構は東郭の外に位置しており、中央郭や東郭の構築時には重要度を選別した可能性もある。その場合、重要な聖域以外を囲ったことになる。

残念ながら他の遺跡では、そのような要素があるのかどうかも現状では不明である。ただマレー半島北西部クダー Kedah のラジャ・ブルシウン Raja Bersiung もヒンドゥ・仏教の聖地ブジャン Bujang 溪谷地域の一部であることを考えれば、宗教的な聖域が初期城郭遺跡と関係深い蓋然性はあるのではないかと。

4-2 イジャンとは何か

フィリピン群島では、スペイン植民地化以前に各地域に多くの小さな王権が生まれていたことは確実である。そのような王権はすでに 11 世紀には、膨大な輸入陶磁器を所有するような広域貿易網に組み込まれていた。

しかしこれまでのところ、そのような先スペイン時代（「交易の時代」）の在地勢力が残した城郭については報告がない。僅かにマニラのスペイン人の拠点イントラムロスのサンティアゴ要塞 Fort Santiago が、在地のイスラーム王権の居住地を壊して建てられた事実を知るのみである。そこはパッシング Pasig 川河口左岸であり、要害地形とは言えない。むしろ交易の利があるので居住していた可能性が高く、城郭ではなかったと考えるのが自然である。

そのような状況を考慮すれば、イジャンを城郭と認識することは大きな間違いではないか。

実際に内部を観察した 2 イジャンと遠望した 4 イジャンは、共通要素がある。まず外側とは隔絶された自然地形が選ばれている。ほとんどが平らに近い頂部を持つ円筒形の岩山で、ディオジョ岬の場合もそのように考えることができる。サヴィドッグは三段の水平堆積地層が残っていたため全体が人為的に造成された構造のように誤認されたが、大部分は自然要素だった。そして平坦に近い頂部は、他と隔絶された特別の領域として認識されたのではないだろうか。ディオジョ岬の積み石壁は、まさしくそのような領域をさらに外側と区切ったものとしてしか理解できない。

次に重要なことは、いずれも現在の集落あるいは過去の集落遺跡に近接するということである。集落への近接は、もちろん逃げ城としての城郭にも意味がある。しかし頂部は一定期間居住するような自然条件はなく、また人為的な要素も持っていない。

別の点から見ると、もしイヴァタン社会に集落同士の抗争があったとするなら、集落自体を囲うような防衛施設を作る方が自然ではないだろうか。そのような遺構や遺跡の存在を、ディソンは語っていない。バスコの博物館には 3 点の舶載陶磁器があったが量的には少なく、イヴァタン社会は基本的に陶磁貿易網の外にあったと考えるのが自然である⁽²⁰⁾。陶磁器に象徴されるような外来

の威信財の所有は抗争の理由になりうるが、乏しい状態では抗争目的を考えることは難しい。

そのような点を考えると、イジャンとはバタン島とサブタン島に住んでいたイヴァタン社会に共通する祭祀遺跡とするのが妥当だろう。そしてそこに加えられた積み石壁は聖域を区切る役割だった。さらにサヴィドッグに残る有孔石柱は、彼らが行なった信仰生活を考える上で最も重要な資料とすることができる。

4-3 イジャンとラサリム一城

ルソン島北側のバシー海峡のバターネス諸島とスラウェシ島南東のブトン島の間は、南北に4千キロ近く離れている。当然、両者の間には、共にオーストロネシア語族に属する人々が住んでいること以外に直接の共通点はない。

しかし遺跡立地の観点に立つと似ている点があり、同時に異なっている点もある。以下、イジャンとラサリム一城中心部の各要素をまとめてみよう。

立地 イジャン：頂部が比較的平坦な集落を見下ろす円筒形状の岩山

ラサリム一：頂部が比較的平坦な港を見下ろす岩山

バターネスの集落は基本的に海岸にあるので、この様子はかなり類似していると言える。イジャンの選地は各集落近くが目立った岩山を選んでおり、自然条件の差で実際には必ずしも全てが同じような形ではないが、集落を見下ろす目立った岩山で、周囲とは隔絶された形状が選ばれたことは間違いない。

ラサリム一の中心部は草木の繁茂のため形状を確認し難かったが、平坦な台地端に位置するコブのような珊瑚石灰岩の独立した丘である。岩の性質により円筒形ではなく横に広がったような形だが、周辺での最高所であり、なおかつ法面の勾配はかなり急である。乾季であっても草木のため自然形状自体は必ずしも現れないかもしれないが、飛び出た高所であるという要素は訪ねた雨季でも識別できた。

人為構造物 イジャン：低い積み石壁と削り出し階段、配石墓（一部）

ラサリム一：低い積み石壁、削り出し入り口、積み石テラス

イジャンは基本的に大規模になされたものは見られないが、それでもサヴィドッグとディオジョ岬でははっきりと積み石壁が残っていた。本来の高さは不

明だが、すでに見たようにそれは多分に境界を示した構造物と考えられる。削り出し階段はサヴィドッグでしか確認していないが、それは水平堆積の礫混じり地層という特殊な条件によるものかもしれない。あまり大規模な構築活動をしていないのが、イジャンの特徴と言える。

またイブホス島のイジャンの下では、15基の舟形配石墓が発見されている。ただしこのような墓地の発見はここだけしか報告がなく、イジャンに共通する遺構とは考えにくい。

それに対してラサリムーの場合、入り口凹部の削り出しは相当な労働力が必要である。また積み石テラスの造成も同様で、かなりの時間と人間を使っていることは間違いない。一方、積み石壁の残存高さは低く、正面と裏側の入り口また左側の縁辺に残る壁はいずれも同様である。入り口凹部の削り出しに比べ同じ部分に残る積み石壁はあまりに簡単で差が大きいが、他の部分にも同様の積み石壁があったので、同じ目的でなされたと言える。入り口凹部の本来の岩がどのような状態であったかは分からないが、かなり幅広く垂直に削られたため遠くからも十分に識別できることになった。

このような広すぎる入り口は純粋に防衛目的を考えれば、あまりに不自然である。特に水場を内部に持たないことは、外敵の攻撃からの防衛を企図した目的とはそぐわない。また積み石テラスは外部からは最も目立つ場所であり、そこが何の胸壁もなくただ水平に築かれたのは、やはり同様に城郭的発想とは言いがたい。

以上のように、人為構造物は違いが大きそうに思われるが、内容的には共に象徴的な目的をもって構築されたと考えられる。

遺物 イジャン：有孔石柱、甕形土器

ラサリムー：不明

サヴィドッグの有孔石柱は最も顕著な遺物であり、同時に2個が原位置で直立していることから最終使用状態も示していると言える。すなわち小型でもあるものの直立されているため、メンヒルの一種と考えられる。この場合、上端の貫通する穴が、最も意味のある加工と考えられる⁽²¹⁾。ディオジョ岬の土器も、平坦な頂部でなされた行為を考える上で示唆的である⁽²²⁾。何らかの非日常的な祭祀行為という枠組みでは、両者は共通している。

つまりイジャンは広い意味での巨石文化の中で生まれたと考えられ、年代的には少なくともスペイン人支配が始まる18世紀末よりは古い可能性が高い。

残念ながらラサリムーでは、年代を推定できるような遺物は確認できなかった。しかし前述のようにブトンの城郭では一般的な陶磁片の存在を確認できなかったことから、少なくとも膨大な量の陶磁器がもたらされた18世紀よりは古い可能性が高い。ブトンでも本来的には巨石文化的なものが中心だったが、ラサリムー内部のイスラーム墓はウォリオ城内に多いメンヒル的な石製墓標はなかった。

以上により、遺物から考えられる両者の年代と帰属文化は、現状では同じとは言えない。

5 まとめ

バターネス諸島のイジャン群とブトン島のラサリムー城は、共に筆者がかつてグスクの起源として想定した「船載陶磁器などの宝物庫を兼ねる宗教(祭祀)空間」という要素は全くない。また特に歴史時代後期の東南アジアの城郭で多く見られるとした「遮断された居住域」という要素も、ほとんどないと言える。

イジャンは他とは隔絶した地形的特徴を生かした祭祀空間と考えるのが妥当であり、集落近くに存在する特徴から集落祭祀場であると言える。ラサリムー城の場合も似た立地だが、祭祀空間であったことを示す材料は不明である。削り出し入り口や積み石テラスの持つ象徴的な意図はそれに関係するかもしれないが、具体的に裏付けることはできない。

しかし共に「宝物庫」ではない城郭類似の形状を示している。それは外部とは隔絶された空間を示すという意味においてである。しかしその内部には居住を示す痕跡は確認できず、水利も含まれていない。低い積み石壁のような設備は象徴的な境界を示しても、外敵の攻撃を物理的に阻む防衛構造とは認識できない。このような状態のものが、グスクと呼ばれる遺跡群にはあるのだろうか⁽²³⁾。

東南アジア群島部の城郭には、石積基壇遺構の聖地から出発して後に土塁と空堀によって複数の郭が形成されて陶磁貿易にも関係したプグン・ラハルジョのような例がある。実際に陶磁貿易網に深く関わった時代のブトンの城郭の多

くは、広域の居住域を囲った「宝物庫を兼ねる祭祀空間」というものが一般的になっている。長距離貿易網にはほとんど関係しなかったバターンズでは、そのような発展はなかった。しかし両者には、そのような空間の起源とも言えるような共通性を見ることができる。

グスク群の中に似たような例がもしあるなら、島嶼地域での祭祀空間の形成を考える上で重要な比較材料と言えよう。

参考文献

- Dizon, Eusebio, 'Preliminary report on the archaeological explorations in Batan, Sabtang and Ivuhos Islands, Batanes Province, Northern Philippines', Chung-tong Yeung, Wai-ling, & Brenda Li ed. *Archaeology in Southeast Asia*, Hong Kong: The University Museum and Art Gallery, University of Hongkong, 1995.
- Dizon, Eusebio, 'Stones of the Sea', *Kasaysayan The Story of The Fipipino People vol.2 The Earliest Filipinos*, Asia Pub., Philippines, 1998, pp.126-143.
- Dizon, Eusebio, 'The Archaeological Relationship Between the Batanes Islands (Philippines), Lanyu Island (Taiwan) and the Okinawan Islands (Japan)', 青柳洋治先生退職記念論文集編集委員会『地域の多様性と考古学』、雄山閣、2007、pp.87-96.
- Dizon, Eusebio & Rey A. Santiago, 'Archaeological Explorations in Batanes Province', *Philippine Studies* vol.44-4, Ateneo de Manila University, 1996, pp.479-488.
- Koomoto Masayuki, 'General survey in Batan Island', Shirakihara K. ed. *Batan Island and Northern Luzon archeological, ethnographical and linguistic survey*, University of Kumamoto, 1983, pp.17-67.
- Sasaki Komei, *The Scientific Expedition for the Study of the Batan Islands*, Ritsumeikan University.
- Shirakihara Kasumi, 'Excavation at Sumhaw site and PAG-ASA site', Shirakihara K. ed. *Batan Island and Northern Luzon: Archeological, ethnographical and linguistic survey*, Kumamoto University, 1983, pp.1-15.
- 坂井 隆「東南アジアの城郭-グスクへの試論ノート-」『東南アジア考古学』27、東南アジア考古学会2007a、pp.101-109
- 坂井 隆「インドネシア・マレーシアの都市と城郭」『東南アジア考古学会研究報告5 東南アジアの都市と都城III』、東南アジア考古学会、2007b、pp.31-45
- 坂井 隆編『バンテン・ティルタヤサ遺跡、ブトン・ウォリオ城跡発掘調査報告書』、NPO 法人アジア文化財協力協会、2007
- 山口裕子『歴史語りの人類学』、世界思想社、2011
- 山口裕子「未完のファミリー・アルバム-東南スラウェシ州の、ふたつの英雄推戴運動-」

註

- (1) Dizon & Santiago 1996 なお各島の確認数は、バタン島4箇所・サブタン島10箇所そしてイブホス島5箇所である (Dizon1998 p.128)。
- (2) Dizon & Santiago 1996 pp.495-496, Dizon1998 pp.140-141及びDizon2007
- (3) 東南アジアの城郭の基本は、他から遮断された居住空間として理解した。しかし群島部の一部にはブトン地方など城郭が濃厚に分布する地域が見られ、それは祭祀空間の形成から発達した琉球のグスクと似た発展過程をとった可能性を推定した (坂井2007a pp.106-107)。
- (4) 異常に多くの城郭が残るブトン地域の特異性は、急激に外来勢力が到来したこととの関係を推定した (坂井2007b pp.41)。
- (5) 2015年の統計では1万7千人程度で、フィリピンで最も人口が少ない州となっている。
- (6) 台湾南東の離島蘭嶼に住むタオTao (ヤミYami) 人の言語はイヴァタン語とかなり近く、800年ほど前にバターネスから移住したと考えられている。
- (7) 他に田中和彦 (鶴見大学) ・菊池誠一 (昭和女子大学) そして劉益昌 (台湾国立成功大学) らが同行した。
- (8) バターネス諸島には他に現在人の住む島としてバタン島北北西約30キロにイッバヤツ Itbayat島があるが、ディソンによればこの島にはイジャンはない。
- (9) Dizon 1998 p.132 残念ながらこの青磁片については、詳細な報告はなされていない。なおバスコ博物館には後述のように、14世紀頃と考えられる福建系粗製口禿げ青磁碗があった。
- (10) Dizon & Santiago 1996 pp.492-493. なお後の報告では、名称をチュハンギン Chuhangin・イジャンとしている (Dizon 1998 pp.128 & 132-137)。両者は同じものと思われる。
- (11) 2010年の統計は約45万人で、30%強の14万人が南西部の首邑バウバウBau-bauに住んでいる。
- (12) ウオリオ城跡と近隣の関連城郭について、筆者らはかつて発掘調査と踏査を行なった (坂井編2007)。
- (13) 他に瀧本正志 (福岡市教育委員会) とナニツ・ウィビソノNaniek Wibisono (インドネシア国立考古学センター) が同行した。
- (14) 栈橋が一つマングローブ林から伸びているだけの小さな港だが、ブトン島の東に連なるワカトビWakatobi列島との連絡船が運航している。また栈橋脇は、海洋民バジョー Bajau人の水上集落だった。
- (15) ラサリムーはブトン最古のトゴ・モトヌTogo Motonu王国があった場所とされる (山口2011 p.332)。また同スルタンのオランダへの抵抗については、山口裕子が詳しく紹介している (山口2017)。
- (16) 両側に胸壁を持つ珊瑚石灰岩造の防御区画があり、両者の上を木造の壁なし切妻建物を渡した構造の城門。建物は、妻方向を正面に向ける。
- (17) 踏査を行なった時点は、ブトンではヒマヤトゥディーンをインドネシアの国家英雄への

推戴運動が盛んになっていた（山口2017）。この修復はそれとの関係が考えられ、またこの城郭を紹介したバウバウ市文化局の意図もそこにあった可能性がある。

- (18) マレー半島クダールKedahのラジャ・ブルシウンRaja Bersiung、スマトラ北部バルースBarusのロブー・トゥアLobu Tua、スマトラ南部ランブンプンLampungのプグン・ラハルジョPugung Raharjo、ジャワ西部バンテンBantenのバンテン・ギランBanten Girangなどである（坂井2007b pp. 32-34）。
- (19) 一条だけになる東側の堀は深いバンテン川の流に近接平行して掘られており、防衛的には意味をなさない。そして築造当初の遺構ではないが、この部分の堀の法面に瞑想用の石窟が掘削されてさえている。
- (20) 14世紀頃の福建系口禿げ青磁碗（2002-11の注記）、15世紀初頭頃の同白磁碗（注記なし）そして19世紀同双喜文青花碗（Mahataoの注記）のみを確認した。
- (21) ディソンはバタン島マハタオに残る民家で石灰岩製の同種有孔石柱が入り口の建材として使われている例（1孔）、また高床倉庫の石柱としての使用例（1孔と2孔）を紹介している（Dizon & Santiago 1995 pp. 486-487）。前者では孔は何の構造的役割も果たしていなく、いずれも再利用である。一方台湾南東部の卑南遺跡には、月石と名付けられた有孔石板が現在でも建てられた状態で残っている。本来は5×2メートルほどの大きさで、上端には直結10センチ以上の円孔が2箇所開けられてあった。台湾南端に近いバターネスの位置を考えれば、何らかの似たような発想でなされたのかもしれない。
- (22) 熊本大学ティームはサヴィドッグ・イジャンで印文土器と甕棺を発見している。またディソンもそこでの土器の発見を報告している（Dizon & Santiago 1995 pp. 489 & 494）。サヴィドッグでの試掘では、イノシシやヤギの骨が出土した（Dizon 1998 p. 131）。
- (23) ディソンは早くからグスクとの類似性を想定しており、イジャンとはほとんど類似性が考えにくい15世紀代の座喜味グスクや中グスクの平面図を紹介している（Dizon & Santiago p. 496）。

写真出典：全て筆者撮影

地図出典：Google Earth



写真1 サヴィドッグ・イジャン



写真2
同削り出し階段



写真3 同中段



写真4
同有孔石柱群



写真5
同有孔石柱



写真6
同法面



写真7 同西尾根からの遠景



写真8 ディノジョ岬イジャン



写真9 同鞍部側崖面



写真10 同積み石壁跡



写真11 同積み石壁



写真12 同甕形土器片



写真13 同頂部（西から）



写真 14
同頂部（東から）



写真 15 バスコ・イジャン遠景



写真 16 同全景



写真 17 同頂部（裏から）



写真 18 同頂部（表側）



写真 19
イップッド・イジャン遠景



写真 20
サブタン・イジャン遠景



写真 21
チャバヤン・イジャン



写真 22
ラサリム一城中心部遠景



写真 23 同正面入り口（表側）



写真 24 同正面入り口（裏側）



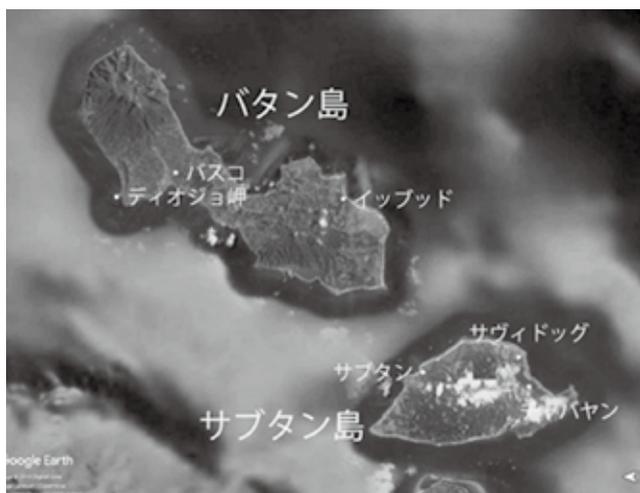
写真 25 同内部空間



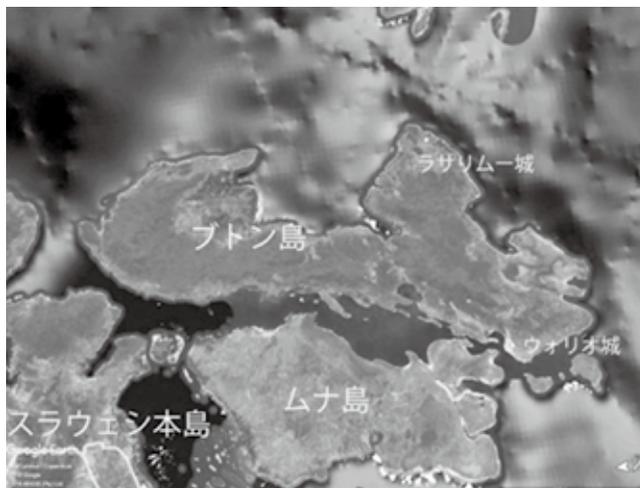
写真 26 同裏側入り口



写真 27 同積み石テラス



地図 1
バタン島とサブタン島



地図 2 フトン島